



Title	周溝墓出土土器からみた葬送儀礼の地域性：弥生時代中期の大阪湾沿岸地域を中心に
Author(s)	蓮井, 寛子
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2022, 56, p. 57-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94860
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

周溝墓出土土器からみた葬送儀礼の地域性

—弥生時代中期の大阪湾沿岸地域を中心に—

蓮井 寛子

キーワード：弥生時代／方形周溝墓／土器／葬送儀礼／地域性

はじめに

弥生時代中期の墓制を特徴づける方形周溝墓は、遺物から多様な葬送儀礼の実相をうかがうことができる。特に、各地の周溝墓で普遍的に出土する土器は、各地域や造墓集団に即した儀礼内容を強く反映する遺物であり、その様相の変化は弥生中期社会の複雑化の一端をも示すと考えられる。

大阪湾沿岸地域は周溝墓検出事例の多さから研究の蓄積が厚く、中期社会の複雑化を考えるうえでも重要な地域である。しかしながら、当該地域の周溝墓研究は特定の大型墓に焦点が絞られており、墓制の全体像の把握は未だ十分でない。

そこで本論では、弥生時代中期における大阪湾沿岸地域の周溝墓出土土器を分析の中心とし¹⁾、土器の器種組成、墳丘規模・埋葬主体数との数量的関係、穿孔打欠土器の分析などから、葬送儀礼の地域性や時期的変遷²⁾を検討する。

1. 研究略史と問題の整理

(1) 研究略史

周溝墓は東京都宇津木遺跡で初めて確認され（大場 1965）、すぐに近畿地

方でも発見が相次いだ。研究初期には墓域からしばしば出土する穿孔壺に注目が集まり、その性格についての議論がなされている。勝部明生氏は穿孔による仮器化を提起し（勝部 1976）、田代克己氏は集団の紐帯確認を目的とする共食儀礼後、ケガレを祓う意味で使用土器を穿孔・廃棄したと想定した（田代 1986）。また、辻本宗久氏は、供献土器の目的や性格が「供献行為」と「廃棄行為」に分かれることを指摘した（辻本 1987）。

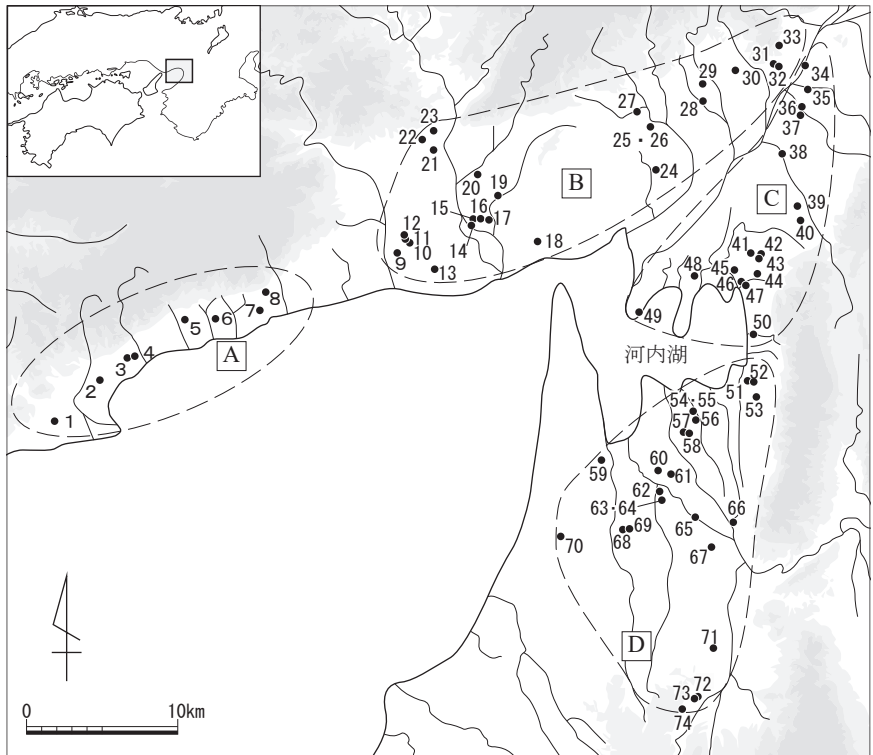
その後は資料数が大幅に増加したことで、大量の土器を共食儀礼後に破砕投棄する「大量土器廃棄行為」（大庭 1995）、意図的に破砕した土器を近隣の墓などに散布する「破砕散布儀礼」（藤井 2004、藤井・塚原 2007）など、多様な葬送儀礼の実態が指摘されるようになった。相馬勇介氏は墓域から出土した穿孔土器を地域・時期ごとに整理し、中期中葉以降に穿孔儀礼の定着度や手法等に地域性が表出することを示した（相馬 2020）。一連の葬送儀礼のなかで、祭祀の方法や用いる遺物が場面・集団により選択された（中村・秋山 2004、川部 2011）と考えられる。

さらに、墓域で用いられる土器の選択性についても研究が進められている。大庭重信氏は、液体の加熱に適した器種が葬送のために選択されると指摘したうえで、器種組成の時期的変化の背景に葬制の変化が影響した可能性を示唆している（大庭 1992・2008）。若林邦彦氏は、生駒西麓産土器が墓域で選択的に使用される状況を明らかにした（若林 1997）。

葬制に関わる遺物の選択性は、木棺研究からも指摘されている。福永伸哉氏は、木棺小口板の木取り法が出自集団によって異なる可能性を示した（福永 1991・2020）。

(2) 本稿の射程

既往研究により、葬送儀礼に関与する人々が儀礼行為や使用土器・木棺の選択をおこなっていた可能性が指摘されており、その選択には集団や地域の差異が反映されると考えられる。したがって、墓域出土遺物や儀礼痕跡の様相を地域ごとに比較分析することで、葬送儀礼の地域性に迫ることができよう。



- | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|
| A: 六甲山南麓地域 | 19 新免遺跡 | 38 星丘西遺跡 | 57 新上小阪遺跡 |
| 1 戎町遺跡 | 20 蛭池北遺跡 | 39 上の山遺跡 | 58 山賀遺跡 |
| 2 楠・荒田町遺跡 | 21 下加茂遺跡 | 40 坊領遺跡 | 59 桑津遺跡 |
| 3 生田遺跡 | 22 加茂遺跡 | 41 高宮遺跡 | 60 加美遺跡 |
| 4 雲井遺跡 | 23 栄根遺跡 | 42 太秦遺跡 | 61 久宝寺遺跡 |
| 5 都賀遺跡 | 24 東奈良遺跡 | 43 大尾遺跡 | 62 亀井遺跡 |
| 6 郡家遺跡 | 25 郡遺跡 | 44 鎌田遺跡 | 63 城山遺跡 |
| 7 北青木遺跡 | 26 倍賀遺跡 | 45 薮屋北遺跡 | 64 長原遺跡 |
| 8 森北町遺跡 | 27 中河原遺跡 | 46 中野遺跡 | 65 田井中遺跡 |
| | 28 溝之江南遺跡 | 47 雁屋遺跡 | 66 大県郡条里遺跡 |
| B: 武庫川～淀川右岸 | 29 嶋上郡衙遺跡 | 48 古川遺跡 | 67 川北遺跡 |
| 9 東武庫遺跡 | 30 安満遺跡 | 49 森小路遺跡 | 68 三宅西遺跡 |
| 10 武庫庄遺跡 | 31 梶原南遺跡 | 50 中垣内遺跡 | 69 瓜破遺跡 |
| 11 南戸板遺跡 | 32 上牧遺跡 | | 70 山之内遺跡 |
| 12 道ノ下遺跡 | 33 神内遺跡 | D: 中・南河内地域 | 71 喜志遺跡 |
| 13 栗山・庄下川遺跡 | | 51 鬼虎川遺跡 | 72 喜志西遺跡 |
| 14 田能遺跡 | C: 淀川左岸～北河内 | 52 西ノ辻遺跡 | 73 谷川遺跡 |
| 15 口酒井遺跡 | 34 楠葉野田西遺跡 | 53 鬼塚遺跡 | 74 甲田南遺跡 |
| 16 原田西遺跡 | 35 招提中町遺跡 | 54 瓜生堂遺跡 | |
| 17 勝部遺跡 | 36 九頭神遺跡 | 55 岩田遺跡 | |
| 18 小曾根遺跡 | 37 交北城ノ山遺跡 | 56 巨摩遺跡 | |

図1 大阪湾沿岸地域における弥生時代前期～中期後葉の周溝墓分布図

また、周溝墓研究は中河内地域の大規模周溝墓を中心として議論が進められているが、大阪湾沿岸地域全体の葬制の地域的傾向は十分に把握されていない。近年の発掘事例を踏まえた再整理が必要である。

そこで本稿では、大阪湾沿岸地域の弥生時代中期周溝墓を中心に、小地域ごとの葬送儀礼の傾向を検討し、葬制の地域性を示したい。また、他地域との比較を通して、大阪湾沿岸地域に存在する地域的習俗差の背景を考察する。

主な分析対象地域は、資料数の豊富な大阪湾沿岸地域、特に河内・摂津地域である。本稿では地域性をより明確にするため、対象地域を A：六甲山南麓地域、B：武庫川流域～淀川右岸域、C：淀川左岸域～北河内地域、D：中・南河内地域の4地域に分けて分析する（図1）。

2. 大阪湾沿岸地域における葬送儀礼の小地域性

弥生時代前期後半に出現する周溝墓は、中期前葉になると一気に拡大する。特に淀川流域では、中期前葉に小規模な単数埋葬の周溝墓が多く造営される。中期中葉以降は、中河内地域を中心に複数埋葬化に合わせて墳丘の大型化、埋葬配列の多様化が起り、被葬者の階層表現が進行すると指摘される（大庭 1999）。本章では、墓域出土土器の器種組成、土器に残る穿孔等の儀礼痕跡、墳丘規模と埋葬数の関係を中心に分析をおこない、大阪湾沿岸地域内にみられる葬送儀礼の地域性について検討を進める。

(1) 使用土器の差異にみられる小地域性

旧国単位での器種組成の整理

まず、葬送儀礼に使用される土器の器種組成を整理し、墓域でおこなわれた葬送儀礼の状況を把握したい。摂津・河内の墓域出土土器の器種組成については、1990年代に大庭氏が壺の利用率の低下や、高坏や鉢といった供膳具の増加を指摘している（大庭 1992）。

図2は、最新資料を加えて摂津・河内地域の器種組成の変遷を示したもの

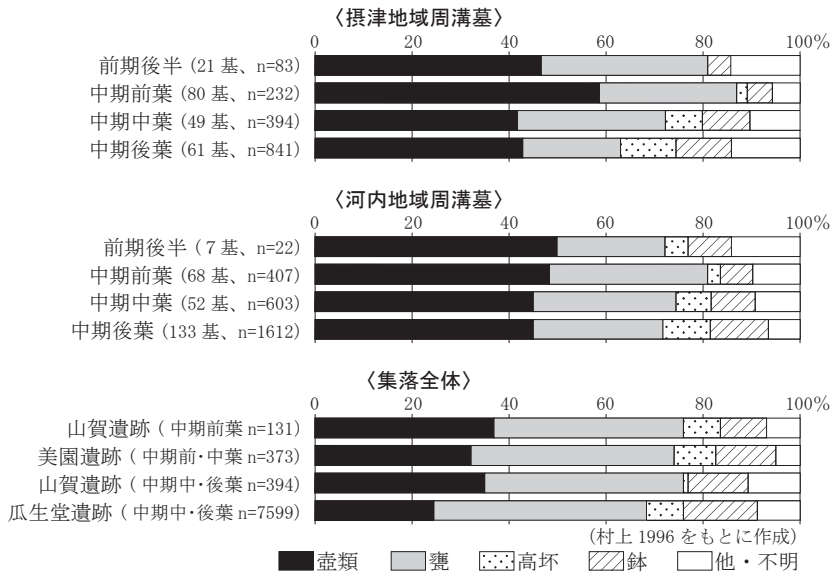


図 2 器種組成の変遷

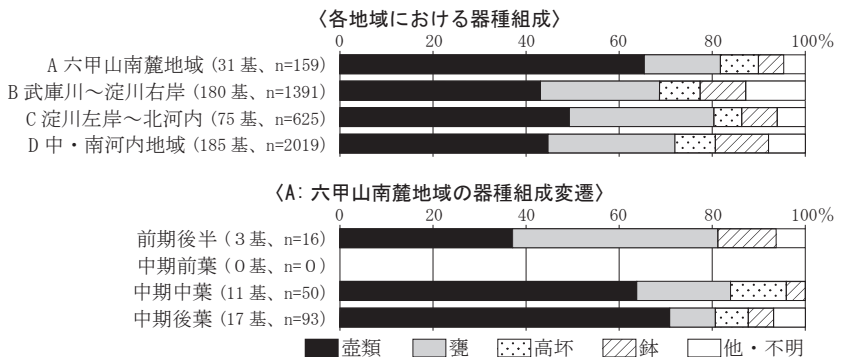


図 3 小地域ごとの器種組成

である。これを見ると、大庭氏の指摘する供膳具の増加傾向は一定程度認められる一方、壺比率の低下は顕著でない。集落全体での器種組成と比較すると、墓域で壺が多く出土する傾向は大庭氏の指摘（大庭 1992・2008）と一致する。なお、周溝墓1基あたりの土器出土量はしだいに増加するようである。

小地域ごとの比較

葬送儀礼の地域性をより明確に把握するため、大阪湾沿岸地域を A～D の 4 つの地域（図 1）に分け、器種選択の地域的差異を検討する。各地域の状況を比較すると（図 3 上）、A 地域では壺の出土比率が高く、大阪湾沿岸地域内では特異な様相を示すことが分かる。A 地域にみられる壺の多用は中期中葉に顕在化する（図 3 下）。

ここまでの器種組成に関する分析をまとめると、大阪湾沿岸地域では葬送儀礼に壺や甕が選択される傾向にあり、中期中葉以降の A 地域では他地域と比較して壺の出土比率が高いことが明らかとなった。

(2) 穿孔打欠儀礼の展開と地域性

葬送儀礼で使用される土器のなかには、液体等の加熱を伴う儀礼の後に、土器の一部を穿孔や打欠³⁾によって意図的に欠損させる行為のおこなわれた事例がみられる。本稿では周溝墓出土土器に焼成後穿孔や打欠といった意図的な破損が認められる場合、葬送儀礼に伴う儀礼痕跡と考える⁴⁾。穿孔打欠土器は残存状況や出土状況により確認数が影響されるため、穿孔打欠土器として認識可能な資料は実数のうちの一部であると考えられる。ただし、多くの資料をもとにしたデータ分析をおこなうことで、その地域的・時期的傾向を大まかに掴むことは可能であろう。

穿孔打欠儀礼の多寡

穿孔土器の出土頻度は、地域によって異なることが指摘されている（相馬 2020）。筆者は穿孔土器のほか、葬送儀礼時に口縁部などを意図的に打ち欠いたと考えられる資料も検討に加える。全出土土器中における穿孔打欠土器の比率を比較すると（図 4）、A・D 地域は穿孔打欠土器の比率が 10 % 以上であるのに対し、B・C 地域では穿孔打欠土器はほとんど出土しない。すなわち、穿孔打欠儀礼が葬送儀礼のなかで普遍的におこなわれる A・D 地域と、基本的におこなわれない B・C 地域に分けられるようである⁵⁾。なお、時期が下るにつれ、穿孔打欠儀礼の多寡に示される地域性は顕著となる。

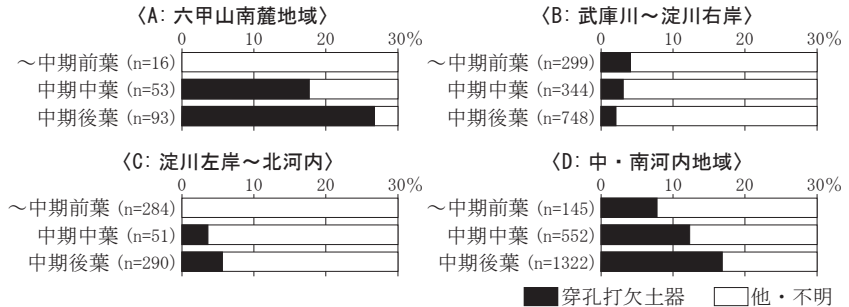


図4 穿孔打欠土器比率の地域性と変遷

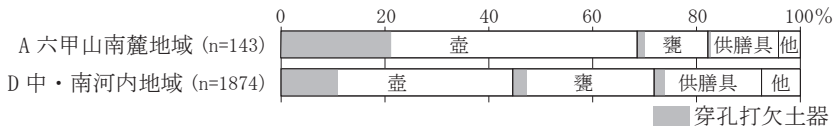


図5 中期中・後葉における全出土土器中の穿孔打欠土器器種組成

穿孔打欠土器の器種組成

次に、穿孔打欠土器が多く出土する中期中葉以降のA・D地域に分析の対象を絞り、穿孔打欠儀礼の地域性をより詳しく検討する。

まず、穿孔打欠土器の器種組成について両地域を比較する。図5より、A地域では穿孔打欠に壺を多く選択する傾向を看取できる。A地域では先に述べたように周溝墓出土土器全体に占める壺類の出土比率は高いが、その器種組成と比較しても穿孔打欠土器の壺類比率は圧倒的に高く、高杯や鉢といった供膳具への穿孔はほとんど存在しない。したがって、A地域では穿孔打欠が壺類にほぼ限定されるような状況をうかがうことができる。

D地域も壺への穿孔打欠は多いものの、飲食物の加熱に直接利用されたとは考えにくい、供膳具への穿孔打欠事例が散見される点は注意する必要がある。供膳具への穿孔は、土器本来の機能を失するという穿孔儀礼の実質的な効果を期待できないことから、穿孔儀礼が象徴的な儀礼行為として確立された可能性を示唆するとの指摘がある（中村・秋山2004、相馬2020）。

また、筆者の実見により、D地域では液体の加熱に用いられる壺・甕・水

差のほか、通常被熱を受けない供膳具に煤や赤変などの熱を受けた痕跡が多く認められることを確認した。特に穿孔打欠のなされた供膳具は被熱痕を有する場合が多く、穿孔儀礼と被熱はセットとして認識されていた可能性がある。

D 地域では本来の穿孔打欠儀礼が形骸化し、供膳具を含む多様な器種に穿孔打欠儀礼が拡散すること、穿孔打欠供膳具にも被熱痕を確認できることが A 地域と異なる点であろう。

穿孔打欠位置の地域性

穿孔打欠土器は器種の選択だけでなく、穿孔打欠の手法にも地域的・集団的な差異が認められる。以下では、穿孔打欠の手法を分類するため、その差異が明確に表れる穿孔打欠位置（図 6）に注目し、A・D 両地域の穿孔打欠手法の傾向を比較する。ただし、器種組成の差異がデータに影響する可能性を考え、分析対象は中期中葉以降の A・D 地域で共通して出土する、穿孔打欠のなされた壺・甕に限定する⁶⁾。

穿孔打欠部の位置を A・D 地域で比較したものが図 7 である。両地域とも体部下位穿孔が最も多く、口縁部の打欠⁷⁾も散見されるが、底部面穿孔の占める比率は両地域で異なる。D 地域では約 8 %が底部面穿孔であり、長原遺跡東北地区（杉本編 2008 など）や瓜生堂遺跡北西部（松宮編 1997 な

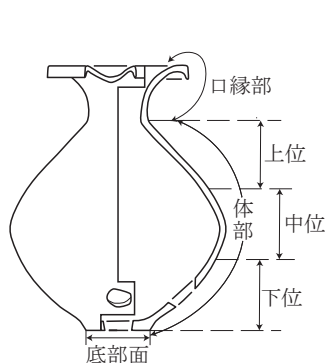


図6 穿孔打欠位置の理解

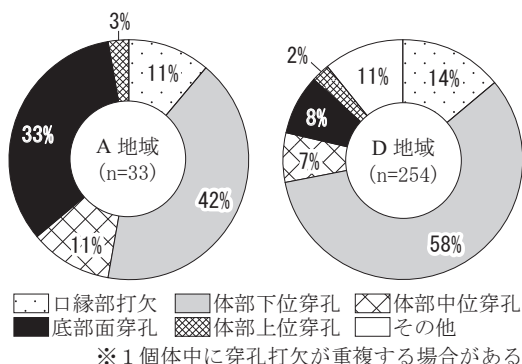


図7 中期中・後葉における壺・甕の穿孔打欠位置

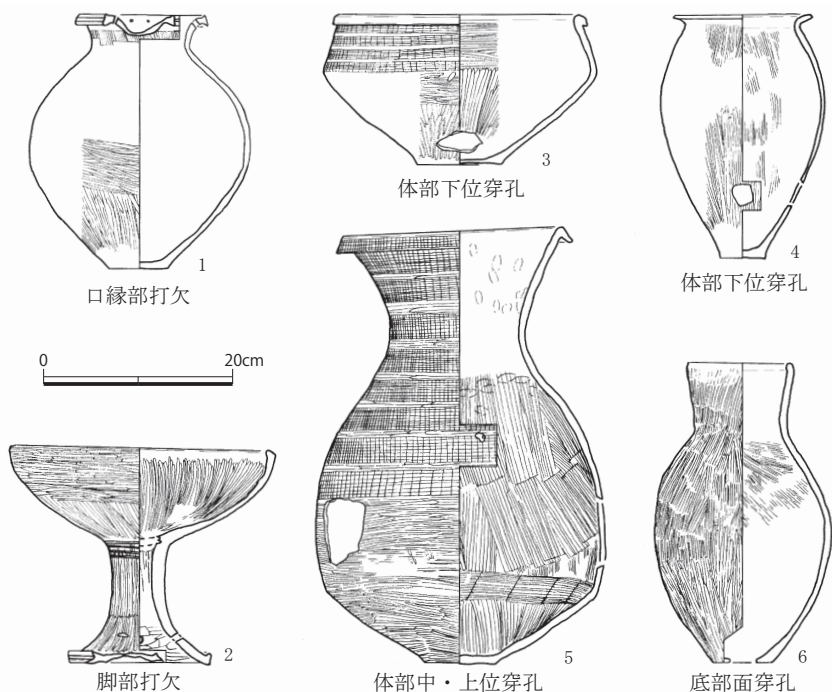


図8 穿孔打欠土器諸例

ど) などの特定の墓域で限定的に出土する一方、A 地域では雲井遺跡（丹治 1991）や北青木遺跡（川上・井上編 2014 など）、楠・荒田町遺跡（丸山 1990）など、多くの遺跡で底部面への穿孔が散見される。底部面への穿孔は A 地域において普遍的であるが、D 地域では例外的な様相であると捉えることができる。

体部下位と底部面への穿孔の間にある当時の認識の区別は不明であるが、器壁の厚い底部面への穿孔は、体部下位への穿孔と比較して打撃の難易度が高い。にもかかわらず底部面を穿孔し、なかには穿孔部を丁寧に調整する事例（藤井・阿部編 2018 など）も存在することを考えると、底部面穿孔は体部下位穿孔とは明確に区別され、異なる意識が働いていた可能性が考えられよう。

最後に、これまでおこなってきた穿孔打欠儀礼の地域性についての検討をまとめる。まず、大阪湾沿岸地域は穿孔打欠儀礼が盛んなA・D地域と、基本的におこなわないB・C地域に大きく分かれる。穿孔打欠儀礼の盛んなA・D地域の間には、穿孔打欠をおこなう器種の選択や、穿孔打欠位置に地域的な傾向の差異が存在する。A地域では穿孔打欠は壺類にほぼ限定される一方、D地域では壺類・甕が多いながらも供膳具への穿孔打欠例が散見され、被熱痕を有する鉢や高坏が含まれる。穿孔打欠手法は体部下位への穿孔および口縁部の打欠が多くみられることで両地域は共通点を有するが、A地域では器壁が厚いために穿孔は難しいと考えられる底部面への穿孔が一定数存在する点を特異性として見出せる。

(3) 墳丘規模と埋葬主体数、出土土器数の地域的傾向

次に、土器以外の属性として墳丘の規模や埋葬主体の確認数を検討に加え、土器にみられる葬送儀礼の地域性との関連を考えてみよう。

埋葬主体数の変化については、既往研究により、中期前葉までは墳丘中心部への単数埋葬が一般的であり、中期中葉以降に複数埋葬が主体を占めること、埋葬主体の複数化に伴い埋葬配置による階層表現が開始することが指摘されている（大庭 1999）。中期後葉段階には加美遺跡（田中編 2015）や雁屋遺跡（辻本編 1987、野島 1987）で多くの成人埋葬を有する墓が造営され、部分的な調査ではあるが北青木遺跡（川上・井上編 2014、藤井・阿部編 2018）も多数の成人埋葬を有していた可能性が高い。

ただし、1周溝墓内の埋葬主体の多数化や墳丘内での階層表現の発現については、埋葬施設の多く検出される中河内地域を中心として研究が進められており、今回分析の対象としたA～C地域の様相は不透明である。そのため、まずは大阪湾沿岸地域内における各地の埋葬主体数・墳丘規模の状況を確認する必要がある。なお、本稿で用いる墳丘規模の数値は、残存度が高いと考えられる墳丘基部の面積（図9）を用いる。

大阪湾沿岸地域内の各地域における単数埋葬・複数埋葬の選択と墳丘規模

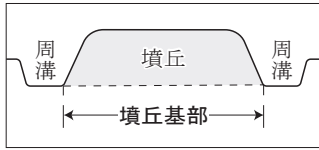


図9 墳丘規模の理解

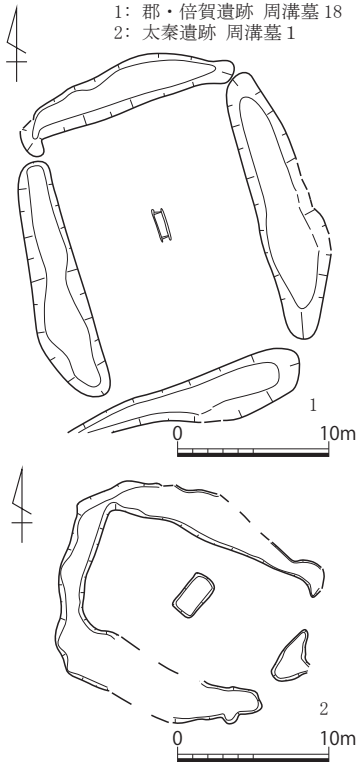
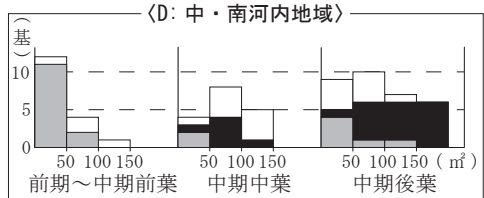
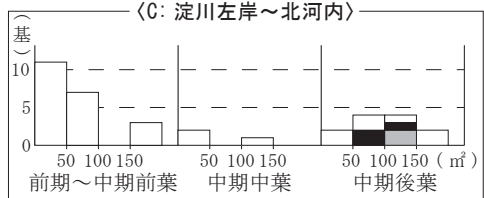
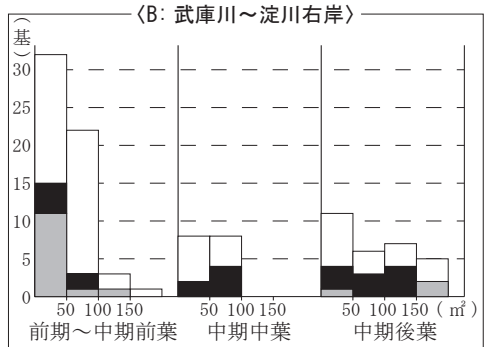
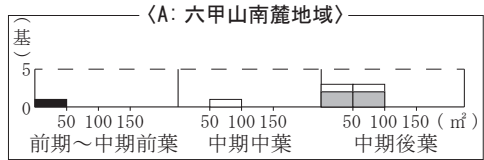


図10 大型単数埋葬墓諸例



■ 単数埋葬 ■ 複数埋葬 □ 不明
※墳丘規模の把握できる事例をグラフ化

図11 墳丘規模と単数埋葬・複数埋葬の選択

の変遷を示したヒストグラムが図11である。注目したいのは各地域の単数埋葬墓の動向である。A地域では、小規模単数埋葬墓が中期後葉に一定数確認できる。B～D地域は既往研究で指摘されるように（大庭1999）、中期中葉以降に単数埋葬から複数埋葬主体へと変化する。

ここで中期後葉のB・C地域の状況をみると、地域内で最大級の周溝墓に

単数埋葬を選択する傾向が看取できる。被葬者は1墳丘内に埋葬される集団の一員ではなく、その埋葬空間を占拠する立ち位置の人物である可能性が考えられる。こうした単数埋葬墓は土器出土量の多い事例が散見され、立地的にも墓域内で独立する事例がある。他の周溝墓の葬送儀礼とは一線を画す大規模祭祀がおこなわれた場であったと考えられ、甕が若干多く出土すること、祭祀用の精製土器や土製品・木製品が出土することからも、他の周溝墓とは様相の異なる儀礼の状況を想定できる。

このような大型墓における大量土器出土例は、中期前葉の招提中町遺跡（山上編 2002）や交北城ノ山遺跡（瀬川ほか 1982）でも確認でき、中期前葉には当該地域で既に大型単数埋葬墓の役割が定着していた可能性を示す。

一方、D 地域では規模の大きな単数埋葬墓はほとんど確認されず、大規模周溝墓のほとんどに複数の埋葬主体が存在する。墳丘規模は複数の埋葬主体を入れるために計画されており、B・C 地域の大規模単数埋葬墓とは埋葬原理が異なるようである。D 地域の単数埋葬墓は墳丘規模 50 m²以上の事例が墓域から独立して営まれる事例は少数あるものの、これらの周溝墓から出土する土器量はそれほど多くない。また、墳丘内に多数の成人埋葬を有する例は河内湖周辺に集中しており、当該地域を特徴づける一要素と言えよう。

(4) 小結

本章の最後に、これまでの分析結果を簡単にまとめたうえで、大阪湾沿岸地域における葬送儀礼の地域性を整理する。

A 地域は墓域に持ち込まれる土器に壺類が多く、体部下位穿孔のほか底部面への穿孔も散見される点で他地域とは葬送儀礼の様相が異なる。大阪湾沿岸地域において特異な葬制を展開した地域といえる。

D 地域は出土土器の器種組成が B・C 地域と大差なく、穿孔打欠土器の比率の高さは A 地域と共通する。ただし、供膳具への穿孔や被熱痕がみられる点、大規模単数埋葬墓の欠如と多数埋葬の存在は、他地域にない特異性として指摘できる。本稿では詳しく触れなかったが、生駒西麓産土器（若林

1997)をはじめとする集落外で生産された土器を墓域に多く持ち込む傾向も、D 地域の特徴であろう。ただし、集落外から持ち込まれる土器の製作地や比率は、墓域によって異なるようである。

B・C 地域は、中期前葉に多くの周溝墓が造営された地域である。A・D 地域で穿孔打欠儀礼が最盛期を迎える中期後葉に入っても、B・C 地域では穿孔打欠儀礼はほとんどおこなわれず、中期を通じて穿孔打欠儀礼が低調な点は特徴的である。また、埋葬数に対して過大な墳丘規模および土器出土量を示す周溝墓が存在することも、A・D 地域では確認できない様相である。

B・C 地域内には地域・遺跡ごとの葬送儀礼の差異は少なからず存在する⁸⁾が、A・D 地域それぞれにみられる地域色と比較すると、さほど顕著な差異とは言えない。したがって、大局的に考えると、B・C 地域は葬送儀礼の特徴を共有する地域として一括りに把握できるだろう。

3. 他地域との比較

次に、前章で確認した大阪湾沿岸地域における葬送儀礼の地域性を他地域の様相と比較し、各地域にみられる葬送儀礼の特異性について考察を深めたい。ここでは、A 地域と地理的に近い東播磨地域の坂元遺跡、玉津田中遺跡と、少し離れた伊勢湾沿岸地域の朝日遺跡を中心に取り上げる。なお、玉津田中遺跡は中期中葉～後葉、坂元遺跡は中期後葉、朝日遺跡は中期前葉（朝日式期）～後葉（凹線文系期）の事例を対象とする。

(1) 器種組成の様相

まず、出土土器の器種選択傾向を地域ごとに比較する。図 12 は、各地域における出土土器の器種組成をまとめたものである。これを見ると、東播磨地域の 2 遺跡、朝日遺跡⁹⁾ともに壺類が多く出土し、前章で示した A 地域の様相と類似することが分かる。また、南関東でも同様の指摘がなされている（及川 1996、立花 1996 など）。前章では A 地域の特異性を示す要素の 1 つと

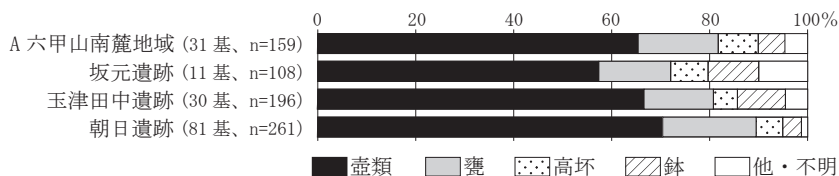


図12 各地の器種組成比較

して壺の出土比率の高さを指摘したが、大阪湾沿岸地域外の状態も含めて考えると、むしろ壺の出土比率の高さは周溝墓制を共有する地域内で一般的な様相と考えることができる。

ここで、墓域に持ち込む土器の器種選択について、その要因として考えられることは何だろうか。壺は液体の貯蔵・運搬に適しているため、居住域から墓域へ飲料を運ぶのに適している。墓域に持ち込まれる壺内の内容物に液体が多いことは、被熱痕のある壺内面に炭化物が付着しない状況（大庭 1992）から明らかである。『魏志倭人伝』の記述のなかに葬送儀礼時の「歌舞飲酒」の記載があることから、葬送の場における飲食儀礼が一般的であった可能性は高い。墓域で飲料を加熱し、参列者に供されたと推測できよう。ここで、多くの地域では壺に被火の痕跡が認められること、居住域と比べて土器外面に煤の付着する比率が高いこと（大庭 1992）を考えると、墓域から被火痕跡を有する壺が多く出土する要因として、居住域から墓域へわざわざ甕を持ち込むのではなく、加熱に適した壺をあらかじめ選択したうえで飲料を入れて運搬し、液体の加熱に用いた方が効率的であったためである可能性が考えられる。

実際、大阪湾沿岸地域のA地域では液体加熱用の直口壺が墓域から多く出土し（丹治 1991）、B・C地域では中型の太頸広口壺の外面に煤が付着する事例の多いことが指摘されている（大庭 1992）。D地域では、器壁の薄く加熱に適した生駒西麓産の中型広口壺外面に煤付着例が多く、加熱用の壺に該当するだろう。

ただし、大阪湾沿岸地域のB～D地域では、甕などの他器種も多く出土す

る。これらの地域では、周溝墓 1 基から出土する土器量が他地域と比べて多く、葬送儀礼がより大規模である傾向が看取できる。特に B・C 地域では周溝墓 1 基から 100 個体以上の土器が出土する事例も散見される。このような場合、中型の壺を 1 つずつ火にかけるのは非効率であり、また、器壁の厚い大型の壺に液体を入れたまま加熱するのも難しい。そのため、加熱により適した甕が多く墓域に持ち込まれた可能性を指摘しておく。

(2) 穿孔打欠儀礼の多寡・手法

穿孔打欠儀礼の定着度や手法についても、他地域の様相と比べてみよう。前章にて穿孔打欠儀礼の頻度は中期中葉以降に差が生じることを示したが、東播磨地域と伊勢湾沿岸地域においても、穿孔打欠儀礼の頻度には地域差が存在するようである（図 13）。すなわち、東播磨地域の玉津田中遺跡では 21 %、坂元遺跡では 37 % もの土器に穿孔や打欠がみられる一方、朝日遺跡では、そもそも周溝墓数に対する土器の出土量が少ないものの、中期中葉に

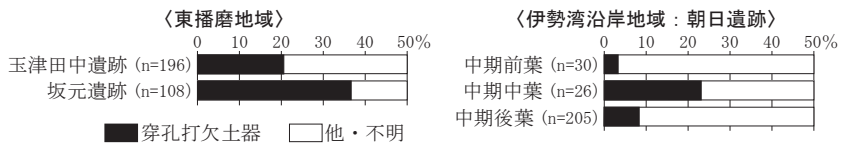
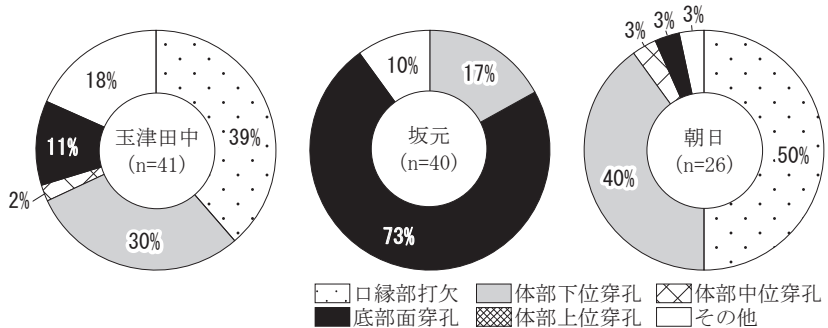


図 13 各地の穿孔打欠土器比率



※ 1 個体中に穿孔打欠が重複する場合がある

図 14 各地の穿孔打欠が施された位置

20 %程度、中期後葉には約 10 %にまで穿孔打欠比率が下がる。ただし、いずれについても大阪湾沿岸地域の B・C 地域と比べると穿孔打欠土器の比率は高く、B・C 地域における穿孔打欠土器の少なさは特異な状況といえる。

穿孔打欠の位置をみると（図 14）、東播磨地域の坂元遺跡では 7 割以上が底部面への穿孔であり、同時期に底部面穿孔が増加する A 地域と関係する事象として捉えることができる。南関東地域などでも底部面穿孔土器の比率の高さは指摘されているが（及川 1996、立花 1996 など）、伊勢湾沿岸地域の朝日遺跡では体部下位穿孔や口頸部の打欠がほとんどであり、特に細頸壺への口頸部打欠が顕著にみられる。穿孔位置に地域性が生じる要因はいくつか考えられるが、1 つには、縄文時代以来の土器棺への底部面穿孔¹⁰⁾と、土器の機能喪失を意図した体部下位穿孔が、何らかの要因で地域性を持ってそれぞれに出した可能性を考えておきたい。

4. 出土土器からみた葬送儀礼の地域性

本稿では、大阪湾沿岸地域内の葬送儀礼の地域性を整理したうえで、その様相を他地域と比較し、各地域にみられる葬送儀礼の特異性やその発現時期を明らかにしてきた。最後に、これまでの検討を簡単にまとめたうえで、各地域にみられる葬送儀礼の特徴の背景について考察したい。

検討の結果、大阪湾沿岸地域の葬送儀礼の状況は、A 地域、B・C 地域、D 地域の大きく 3 つに分かれることが明らかとなった。

A 地域は、大阪湾沿岸地域内では壺の出土比率が高く、底部面穿孔が一定数存在する点で特徴的であり、同様の状況は東播磨地域や関東地方でも確認できる。さらに、1 墳丘内の埋葬主体数の少なさは、南関東地域や東海地域、東播磨地域などと共通する様相である。これらのことから、A 地域は大阪湾沿岸地域内では特異な葬送儀礼をおこなう地域として認識できるが、穿孔土器の様相から考えると近隣の東播磨地域からの情報の波及が関係しているものと考えられ、東播磨や伊勢湾沿岸地域などの大阪湾沿岸地域外にみられる

一般的な様相との共通点も多いことが明らかとなった。

B・C地域の特徴は、穿孔打欠儀礼の低調さ、多くの土器を伴う大型単数埋葬墓の存在を指摘した。穿孔打欠儀礼の低調さは他地域にみられない特異性として認識できる。また、大型単数埋葬墓の存在は南関東など（安藤1996）他地域でも指摘はあるが、B・C地域では中期前葉から後葉にかけて継続的に大量の土器を伴う大型単数埋葬墓が造営される。したがって、B・C地域の葬制は、穿孔打欠儀礼の低調さで特異的ではあるが、周溝墓制を受容した他の地域と共通する要素も見いだせると言えよう。

D地域は、供膳具への穿孔打欠・被火儀礼や、生駒西麓産土器をはじめとする集落外の土器を墓域へ持ち込む事例の多いことが特徴的である。また、多埋葬墓の存在や大型単数埋葬墓の不在もD地域特有の様相であろう。上記のD地域の状況は、大阪湾沿岸地域内に限らず、周溝墓制を受容した地域では他に認められない様相である。つまり、これまで周溝墓研究の中心地として多くの検討がなされ、列島の弥生中期社会の状況を如実に表す事例として注目されてきたD地域の葬制は、周溝墓制全体でみると非常に特異な様相を示すのである。

また、上記に示した大阪湾沿岸各地域の特異性が中期中葉ごろに一斉に顕在化することは、注目する必要がある。この時期は中期社会が成熟し、各地で社会の複雑化が進展する段階である。特にD地域は中期中葉以降、墓域ごとの葬送儀礼の差異が顕在化する。例えば使用土器の製作地や、穿孔打欠手法、供膳具の多用の有無など、隣接する墓群間でも異なる葬送習俗のみられる事例が散見され、葬送儀礼は多様化の傾向を示すようである。

人口の密集するD地域は、系譜の異なる集団が近距離内に集住する状況であり、近隣集団との関係性には敏感であったと考えられる。墓群を造営する主体集団にとって、葬送の場は自集団の帰属意識や紐帯を再確認する重要な機会であった可能性が高い。自集団の紐帯強化を目的として、集団内で独自の儀礼規範を共有したと考えられ、そのためにD地域の葬送儀礼は多様化していったのではないだろうか。D地域で葬送儀礼に著しい多様化の傾向

がみられることは、D 地域が複数系譜の集団の集住する特異な地域であり、集団関係の複雑化の進展が早い地域であったことを示すのかもしれない。

おわりに

本稿では、大阪湾沿岸地域における葬送儀礼の地域性について検討を進め、中期中葉以降に大きく3つの地域性が発現することを示した。また、これまで周溝墓研究の中心であったD 地域は、そのなかでも特異な習俗性を示す地域であるため、大阪湾沿岸地域の葬送儀礼を理解するためには、A～C 地域の様相も考える必要があることを指摘した。

本稿では大阪湾沿岸地域を中心に、東播磨地域、伊勢湾沿岸地域の具体的な出土土器の様相を交えて論を進めたが、周溝墓制を採用する他の地域については、今回は十分に検討できていない。また、本稿では葬送儀礼の地域的な様相の大勢を把握するため、地域ごとの大まかな傾向を検討したが、今回指摘した習俗の地域性のなかにも、小エリア、遺跡ごと、遺跡内の墓群ごとの土器儀礼の現れ方に程度の違いが存在する。よりミクロな分析が今後必要であろう。

これらについて検討を進めることを今後の課題とし、本稿を終える。

[註]

- 1) 報告書掲載資料を対象とし、図化に耐えない細片、混入品等は除外した。
- 2) 周溝墓の時期区分は、出土土器で判断する。河内地域、摂津地域、生駒西麓産土器の編年についてはそれぞれ、寺沢・森井 1989、森田 1990、濱田 1993 に従う。また、東播磨地域は篠宮 2007、朝日遺跡は石黒・宮腰 2007 の編年を参照する。
- 3) 加美遺跡例(田中編 2015)や巨摩遺跡例(片山ほか編 1995)など一部の口縁部打欠土器は、打欠による破面に煤が付着しており、打欠儀礼後にさらに火を受けた可能性も考えられる。ただし、このような事例は稀であり、多くの場合は被熱後に穿孔打欠が施されたと理解できる。
- 4) 特に中期前葉の淀川流域に多い、底部面に錐揉み穿孔の施された甕については、

儀礼に伴う穿孔とは異なり、土器の用途にかかわる意味合いを有すると考えられるため、本稿では検討から除外した。近大山賀遺跡(相馬ほか 2018)や招提中町遺跡(山上編 2002)、交北城ノ山遺跡出土甕がその例である。ただし、中期中葉の加美遺跡2号墓例(田中・大庭 2016)は先の細い工具で底部面へ穿孔を施しており、前述の土器としての使用法にかかわる穿孔と比較して穿孔部の径が小さく実用に不向きと考えられること、同様の工具で体部に穿孔を施す事例が中期中葉～後葉の中河内地域で認められること(松宮編 1997 など)(図8—5)から、儀礼に伴う穿孔と考える。

- 5) 中期中葉以降の周溝墓1基あたりで出土する穿孔打欠土器数を求めると、B・C地域では0.2～0.6個体に留まる。A地域では0.8～0.9個体であり、単数埋葬墓が多いことを考えると、葬送儀礼において普遍的に穿孔打欠がおこなわれたと言える。D地域では1.6～2.2個体が出土する計算になる。
- 6) なお、D地域に多くみられる、高坏・鉢などの供膳具への穿孔打欠事例は、高坏は杯部下位への穿孔と脚部打欠が最も多く、鉢はほとんどが体部下位への穿孔である。
- 7) 口縁部の打欠は出土状況により確認できない場合も多いため、実際の比率はもう少し高いと考えられる。
- 8) B・C地域のなかにも若干の地域性が存在する可能性は指摘しておきたい。北河内地域の雁屋遺跡では、生駒西麓産土器の多用や穿孔打欠土器の多さ、主体部数の多さなど、D地域と共通する点が多い。木棺研究からも、木棺小口板の木取りがD地域で共通するタテ目使いであることが指摘されている(福永 1991)。北河内地域のなかでは雁屋遺跡例は特異な存在であるが、D地域とB・C地域のグラデーション的な様相を呈する遺跡として理解できる。
- 9) 出土壺の内訳は、大阪湾沿岸地域では広口壺が過半数であるが、朝日遺跡は中・小型の細頸壺が中心である。なお、朝日遺跡では中期中葉まで80%以上の周溝墓で土器未検出であるため、土器を用いた儀礼が低調であったか、墓域以外の場所で儀礼行為や土器の供献・廃棄がおこなわれていた可能性が考えられる。
- 10) 縄文時代晩期の土器棺および埋設土器には、底部面を穿孔する事例がみられる。このような事例は、弥生時代中期に墓域出土土器への底部面穿孔事例の多くみられる地域で散見され、逆に濃尾平野や大阪湾沿岸地域のB～D地域といった体部下位穿孔事例の卓越する地域では少ない傾向にある(関西縄文文化研究会 2000 による集成を参照)。

[参考文献]

安藤広道 1996「大型方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会」『みずほ』第18号 大

和弥生文化の会

- 石黒立人・宮腰健司 2007「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会
- 伊藤 武編 2018『郡遺跡・倍賀遺跡1』茨木市教育委員会・大阪府文化財センター
- 及川良彦 1996「南関東①東京都」『関東の方形周溝墓』同成社
- 大場磐雄 1965「方形周溝墓」『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 月報 河出書房
- 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26 大阪大学文学部
- 大庭重信 1995「弥生時代中期の方形周溝墓にみられる大量土器廃棄について—蛭池北遺跡の事例から—」『蛭池北遺跡(宮の前遺跡) 第12次発掘調査報告書』蛭池北遺跡調査団・豊中市教育委員会
- 大庭重信 1999「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 大庭重信 2008「方形周溝墓の葬送儀礼」『弥生時代の考古学』7 儀礼と権力 同成社
- 片山彰一・三好孝一・市本芳三・亀井 聡編 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第4次—』大阪文化財センター
- 勝部明生 1976「穿孔土器の考察—大阪船橋遺跡出土例を中心として—」『横田健一先生還暦記念 日本史論叢』横田健一先生還暦記念会
- 川上厚志・井上麻子編 2014『北青木遺跡第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 川部浩司 2011「方形周溝墓の葬送儀礼にみる諸段階—供献土器から集落関係を描くための前提作業として—」『研究紀要』第20号 三重県埋蔵文化財センター
- 関西縄文文化研究会 2000『関西の縄文墓地—葬り葬られた関西縄文人—』
- 佐原 眞 1970「大和川と淀川」『古代の日本』5 近畿 角川書店
- 篠宮 正 2007「東播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所
- 杉本厚典編 2008『長原遺跡発掘調査報告XVⅡ』大阪市文化財協会
- 杉本二郎・岩瀬 透編 1986『城山(その1)』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 瀬川芳則・桑原武志・宇治田和生・三宅俊隆・西田敏秀 1982「淀川左岸の複合遺跡—枚方市交北城ノ山遺跡—」『ヒストリア』第97号 大阪歴史学会
- 相馬勇介・矢野昌史・荒田敬介・山本 亮・星野安治・高椋浩史・藤田義成・網 伸也 2018「河内平野における初期方形周溝墓群とその構造—東大阪市近大山賀遺跡第5次発掘調査の再整理・報告編—」『民俗文化』第30号 近畿大学民俗学研究所
- 相馬勇介 2020「大阪湾岸における方形周溝墓から出土した穿孔土器の様相」『ひょうご考古』第17号 兵庫考古学談話会
- 田代克己ほか 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会
- 田代克己 1986「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観』鳥越憲三郎博士古稀記念会

- 立花 実 1996「南関東①神奈川県」『関東の方形周溝墓』同成社
- 田中清美編 2015『加美遺跡発掘調査報告Ⅴ』大阪市博物館協会・大阪文化財研究所
- 田中清美・大庭重信 2016『加美遺跡発掘調査報告Ⅶ』大阪市博物館協会・大阪文化財研究所
- 丹治泰明 1991『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 辻本 武編 1987『府立四条畷高等学校校舎増築工事に伴う雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 辻本宗久 1987「弥生時代の墳墓祭祀について—大阪湾沿岸の資料を中心として—」『花園史学』第8号 花園大学史学会
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社
- 中村大介・秋山浩三 2004「方形周溝墓研究と近畿弥生社会復原への展望—瓜生堂遺跡ほか河内湖周辺における弥生墓制の位置づけ—」『瓜生堂遺跡Ⅰ』大阪府文化財センター
- 野島 稔 1987『雁屋遺跡』四条畷市教育委員会
- 濱田延充 1993「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第2集 大阪府立弥生文化博物館
- 福永伸哉 1991「木棺墓と人の交流」『原始・古代日本の墓制』同成社
- 福永伸哉 2020「近畿中部における弥生時代木棺の型式と展開」『柳本照男さん古稀記念論集—忘年之交の考古学—』柳本照男さん古稀記念論集刊行会
- 藤井太郎・阿部 功編 2018『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 藤井 整 2004「弥生時代中期の下植野南遺跡」『下植野南遺跡Ⅱ』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 藤井 整・塚原秀之 2007「時塚遺跡第13次調査」『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成18年度)』京都府教育委員会
- 藤永正明・六辻彩香編 2008『寝屋東遺跡、太秦遺跡・太秦古墳群、大尾遺跡、讃良郡条里遺跡、砂遺跡』大阪府文化財センター
- 松宮昌樹編 1997「Ⅱ 瓜生堂遺跡第42次発掘調査概報」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1995年度調査(1)』東大阪市文化財協会
- 丸山 潔 1990『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会
- 村上富喜子 1996「第1節 土器」『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター
- 森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
- 山上 弘編 2002『招提中町遺跡』大阪府教育委員会
- 若林邦彦 1997「中河内弥生中期土器にみる諸相—「生駒西麓型土器」のもつ意味—」『考古学研究』第43巻第4号 考古学研究会
- 若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—

—『日本考古学』12 日本考古学協会

本稿では、以下の報告を参考に分析をおこなった。紙幅の都合上、遺跡名および調査回数のみを記載する。

【兵庫県】

坂元遺跡：兵庫県 1 次、玉津田中遺跡：兵庫県 5・7 次、戎町遺跡：神戸市 35 次・50 次、楠・荒田町遺跡：神戸市 1 次・3 次、生田遺跡：神戸市 4 次、雲井遺跡：神戸市 8 次・19 次・30 次、都賀遺跡：神戸市 3 次、郡家遺跡：大手前女子大学 4 次、北青木遺跡：神戸市 7 次・8 次、森北町遺跡：神戸市 1 次、東武庫遺跡：兵庫県 1 次・2 次、武庫庄遺跡：尼崎市 22 次、南戸板遺跡：尼崎市 5 次、栗山・庄下川遺跡：尼崎市 7 次、田能遺跡：尼崎市 1 次、口酒井遺跡：伊丹市 9・25 次、原田西遺跡：昭和 56-58 年度、下加茂遺跡：兵庫県 3 次、加茂遺跡：川西市 55・64・88・141・150・151・153・234 次、栄根遺跡：川西市 2・4 次。

【大阪府】

勝部遺跡：豊中市 2 次、小曾根遺跡：豊中市 7 次、新免遺跡：豊中市 13・14・18・31・37 次、蛭池北(宮の前)遺跡：豊中市 1・12 次、東奈良遺跡：東奈良遺跡調査会 1971-1973・1977-1978 年度、大阪府 1987・1993-1994 年度、大阪府文化財調査研究センター 1994-1995 年度、茨木市 1998-1999 年度、郡遺跡：茨木市 2002 年度、茨木市・大阪府文化財センター 2016 年度、倍賀遺跡：茨木市 2 次、茨木市・大阪府文化財センター 2016 年度、中河原遺跡：茨木市 3 次・2001 年度、津之江南遺跡：高槻市 2006 年度、嶋上郡衙遺跡：1972 年度、安満遺跡：高槻市 1972・1980・1981・1982・1983・2008-2010・2014-2015 年度、梶原南遺跡：高槻市 1996 年度、大阪府文化財センター 2019-2020、上牧遺跡：大阪府文化財センター 2017-2019 年度、神内遺跡：高槻市 1998-2000 年度、楠葉野田西遺跡：枚方市 52・71 次、招提中町遺跡：枚方市 33 次、大阪府 1998-1999 年度、九頭神遺跡：大阪府 4 次、交北城ノ山遺跡：枚方市 1 次、星丘西遺跡：枚方市 29・120・127 次、上の山遺跡：大阪府文化財センター 2005-2007・2009、坊領遺跡：交野市・大阪府文化財センター 2016-2017 年度、高宮遺跡：大阪府文化財センター 2001-2002、太秦遺跡：大阪府文化財センター 2003・2004・2005 年度、大尾遺跡：大阪府文化財センター 2001・2004 年度、鎌田遺跡：四条畷市 1993 年度、蔀屋北遺跡：大阪府 2001-2007・2006-2009 年度、中野遺跡：四条畷市 2013 年度、雁屋遺跡：大阪府 1986・1997-1998 年度、四条畷市 1985・1992 年度、古川遺跡：門真市 1998 年度、森小路遺跡：大阪市文化財協会 1987 年度、中垣内遺跡：大東市 1994 年度、鬼虎川遺跡：東大阪市文化財協会 12・22・29・30・31・32・33・46 次、西ノ辻遺跡：東大阪市文化財協会 7 次、鬼塚遺跡：東大阪市文化財協会 8 次、瓜生堂遺跡：瓜生堂遺跡調査会 1973・1975・1978・1979 年度、東大阪市文化財協会 42・46・47・50 次・

1981-1983 年度、大阪文化財センター・大阪府 1978-1980 年度、大阪府文化財センター 1998-2001・2001・2002・2010-2011 年度、巨摩遺跡：大阪文化財センター 4 次、新上小阪遺跡：大阪府文化財センター 2008-2009 年度、山賀遺跡：大阪文化財センター・大阪府 1979-1981、1979-1982 年度、近畿大学 5 次、桑津遺跡：大阪市文化財協会 KW96-13 次・1981-1995 年度、加美遺跡：大阪文化財研究所 KM84-1・KM95-14・15 次、久宝寺遺跡：東大阪市文化財協会 1985 年度、八尾市文化財調査研究会 5 次、亀井遺跡：大阪文化財センター 1980-1981 年度、大阪文化財センター・大阪府 1982-1983 年度、城山遺跡：大阪文化財センター・大阪府 1982-1985 年度、長原遺跡：大阪府 2001-2002 年度、大阪市文化財協会 NG84-34・88-1・88-59・02-8・03-5 次、田井中遺跡：大阪文化財調査研究センター 3 次、川北遺跡：大阪府 1980 年度、三宅西遺跡：大阪府文化財センター 2004 年度、瓜破遺跡：大阪市文化財協会 UR97-19 次、山之内遺跡：YM83-19・86-43・88-36 次、喜志遺跡：大阪府 1980 年度、富田林市 1991 年度、喜志西遺跡：大阪府 1993 年度、富田林市 1997 年度、谷川遺跡：大阪府 1994 年度、甲田南遺跡：富田林市 1995 年度。

【愛知県】

朝日遺跡：愛知県 1972-1979 年度、愛知県埋蔵文化財センター 1981・1985-1989・1995-1996・2004-2007 年度。

〔挿図出典〕

図 1、3～7、9、11～14 は筆者が作成した。

図 2 は、最下図は村上 1996 をもとに筆者が作成し、その他は筆者集成データより作成した。

図 8 の 1 は片山ほか編 1995、2・5 は松宮編 1997、3 は田代ほか 1981、4 は杉本・岩瀬編 1986、6 は丹治 1991 を一部改変して再トレースした。

図 10 の 1 は伊藤編 2018、2 は藤永・六辻編 2008 のレイアウトを一部改変して再トレースした。

謝辞

小稿は 2020 年度に大阪大学文学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。卒業論文作成にあたっては、指導教員の福永伸哉教授をはじめ、高橋照彦教授、上田直弘助教には懇切丁寧なご指導を賜りました。また、考古学若手研究会、大阪歴史学会、大阪府立弥生文化博物館「論壇デビュー」において報告の機会をいただき多くのご教示をいただいたほか、資料調査の際には多くの諸機関にご協力いただきました。末筆ながら、お世話になった方々・機関を記し、感謝の意を表します。(五十音順、敬称略)

秋山浩三、大庭重信、川部浩司、久住猛雄、杉本厚典、相馬勇介、中川朋美、禰宜田佳男、濱田延充、濱野俊一、藤井 整、道上祥武、三好孝一、森岡秀人、山田 暁、ライアン・ジョセフ。

あいち朝日遺跡ミュージアム、伊丹市教育委員会、大阪市文化財協会、大阪府教育庁、大阪府文化財センター、大阪府立弥生文化博物館、大阪歴史博物館、神戸市埋蔵文化財センター、四条畷市立歴史民俗資料館、高槻市立埋蔵文化財センター、豊中市教育委員会、東大阪市立郷土博物館、東大阪市立埋蔵文化財センター、兵庫県立考古博物館、枚方市教育委員会。

(大学院博士前期課程学生)

SUMMARY

Examining Regional Differences in Mortuary Practices through Pottery:
Focusing on the Osaka Bay Area in the Middle Yayoi Period

Hiroko HASUI

This study examined the author approaches the regional characteristics of burial practices through comparative analyses of pottery from the Early to the Middle Yayoi period, which was excavated from burial mounds in the Osaka Bay area.

During the Middle Yayoi Period, pottery was often brought to burial areas, and it is believed that it strongly reflected the ritual contents in line with the local areas and groups. By analysing the choice of pottery, differences in ritual contents can be also considered.

In addition, some of the excavated pieces were perforated or deliberately broken, suggesting that people intended to lose the function of the vessels after funeral feasts. The presence or the absence of these ritual traces and the variety of perforating techniques illustrate differences in the way vessels were handled.

These selectivity and ritual aspects of pottery, as well as the burial methods, are the attributes that represent the local burial customs. However, there has been no progress in research to compile an overall picture of mortuary practices in various regions and to organise their regional characteristics and the process of their development.

Therefore, the author divided the Osaka Bay area into four areas and examined the characteristics of burial practices in each. As a result, it can be understood that the burial practices of the Osaka Bay area can be organised by three distinctive characteristics from the middle phase of the Middle Yayoi onwards.